

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 13 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370629

研究課題名(和文)日本の大学の英語授業における多読の読みの速度に対する効果

研究課題名(英文)The Effects of EFL Extensive Reading on Reading Rates for Japanese University Students

研究代表者

稲垣 スーチン(Inagaki, Shuchun)

大阪府立大学・高等教育推進機構・准教授

研究者番号：50405354

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文): Beglar, Hunt, & Kite (2012) は日本の大学の英語授業に多読を導入し、読む量が多いクラスほど読む速度が増加したことを示し、「読めば読むほど読みの速度が上がる」と結論づけた。しかしながら、開始時の読む速度が高いクラスほど読む量が多く、読む速度の増加も大きかったため、「速く読める人ほど多く読め、その結果、読みの速度もさらに増加する」とも解釈できる。本研究は、学習者を習熟度グループに分け、各グループの多読期間中の読む量と読む速度の伸びを比較することにより、多読開始時の習熟度が、多読期間中の読む量と、それによりもたらされる読む速度の伸びにどのように関係しているかを調査した。

研究成果の概要(英文): Beglar, Hunt, & Kite (2012) implemented extensive reading to English classes at a Japanese university and showed that the more the students read, the faster their reading rates become. However, their data also indicate that the more proficient the students are, the more they read and hence the faster their reading rates become. We conducted a study to examine which interpretation is correct, taking into consideration the learners' proficiency levels at the onset of the study. The analysis of the data is in progress and the results to be reported soon.

研究分野：外国語教育

キーワード：教授法・カリキュラム論

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

(1) 言語習得におけるインプットの重要性は疑問の余地がない。ところが、日本のような外国語圏で英語を習得しようとする、インプットの不足が大きな問題となる。そこで、外国語圏にいながら楽しんで大量の英語に触れることができる多読 (extensive reading) が注目されている。

(2) 筆者はこれまでの研究で、大学の英語授業における多読が全般的英語習熟度の伸長をもたらすこと、さらに、読む速度の増加をもたらすことを示してきた (まとめは稲垣・稲垣 2017を参照)。

(3) Beglar, Hunt, & Kite (2012) (BHK) は、日本の大学における英語学習者を対象に多読授業を実施し、得られた結果から「読めば読むほど読む速度が上がる」と結論づけた。しかしながら、彼らの結果は、「もともと速く読める人ほど多く読め、その結果、多く読んだ人の読む速度もさらに増加する」という解釈も可能である (稲垣・稲垣 2013)。

2. 研究の目的

BHK が主張するように「読めば読むほど読む速度が上がる」のか、それとも「もともと速く読める人ほど多く読め、その結果、多く読んだ人の読む速度もさらに増加する」のかを検証した。

3. 研究の方法

(1) 大阪府立大学と同志社大学において英語を履修する1、2年生4クラス(合計120人)を対象に行った。学生は、グレイデッド・リーダーズ(学習者用に使用語彙や文型の難易度によってレベル別けされた、スリラー、

恋愛小説、推理小説などの読み物)を用いた1学期間の英語多読を行なった。学生は、教室外で最低限1週間に1冊のペース(1学期間で平均12冊、6万語程度)で読み進めた。1冊読むごとにブックレポートを提出し、読書記録シートにタイトル、総語数などを記入していった(各リーダーの総語数はプリントで配布)。最終授業で読書シートを提出させ、各自が読んだ量(平均語数)のデータとした。

(2) プリテストとポストテストを実施し、読みの速度の推移を測定した。テストにはBHKで用いられた400語からなる読み物を使用した(Mikulecky & Jefferies, 1998)。読み物はプリントの片面に印刷され、その裏に内容に関する8つの質問が4つの選択肢とともに提示された。学生は読み物を読み終わると、ホワイトボード上に提示される読み時間を記録し、すぐに裏の質問に答えた。(内容に関する質問は、被験者が理解しながら読んでいることをチェックするためのものである。)

(3) プリテストのスコアに基づき、参加者を上位群、中位群、下位群に均等に分けた。

(4) 二種類の分散分析を行なった。1つ目は、多読開始時の習熟度(上位、中位、下位)を独立変数とし、多読期間中に読んだ量(平均語数)を従属変数とする1要因の分散分析である。これにより、習熟度が高いほど多く読む量が多いかが検証できる。2つ目は、習熟度(上位、中位、下位)を独立変数とし、プリテストからポストテストにかけての読みの速度テストのスコア(1分間に読まれた語数)の伸びを従属変数とする、1要因の分

散分析である。これにより、習熟度が高いほど多読がもたらす読みの速度の伸びが大きいかが検証できる。

(5) このように、習熟度グループに分け、各グループの多読期間中の読む量と読む速度の伸びを比較することにより、多読開始時の習熟度が、多読期間中の読む量と、それによりもたらされる読む速度の伸びにどのように関係しているかを検証した。

4. 研究成果

収集したデータは現在分析中であり、結果は近日中に公開予定である。本研究成果は、BHK の解釈の観点からも、教育への示唆という観点からも重要な示唆をもたらすと考えられる。

<引用文献>

- ① Beglar, D., Hunt, A., & Kite, Y. (2012). The Effects of Pleasure Reading on Japanese University EFL Learners' Reading Rates. *Language Learning*, 62, 665-703.
- ② 稲垣スーチン・稲垣俊史 (2013). 「英語多読の読みの速度に対する効果—Beglar, Hunt, & Kite (2012) の批評—」『言語と文化』(大阪府立大学高等教育推進機構) 第 12 号 pp. 53-58.
- ③ 稲垣スーチン・稲垣俊史 (2017). 『日本の大学英語教育における多読の効果』一粒書房.
- ④ Mikulecky, B. S., & Jefferies, L. (1998). *Reading Power*. White Plains, NY: Addison Wesley Longman.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 稲垣俊史 (2017). 「L1 習得と L2 習得の類似点と相違点—可算・不可算の区別に焦点を当てて—」『ことばの科学研究』第 18 号 pp.8-19. 査読あり
- ② 稲垣スーチン (2016). 「ちょっとした工夫で魅力的な授業へ」『言語と文化』(大阪府立大学高等教育推進機構) 第 15 号 pp.1-6. 査読なし
- ③ 稲垣スーチン (2015). Teaching Writing in an EFL Classroom: An Idea to Get Your Students' Pens Moving. 『大阪府立大学紀要 (人文・社会科学)』(大阪府立大学高等教育推進機構) 第 63 巻 pp. 111-116. 査読なし

[学会発表] (計 7 件)

- ① 稲垣スーチン 使える英語力が身につく英語学習法入門講座、大阪府立大学公開講座、2017 年 10 月 11 日、(大阪府立大学大学羽曳野キャンパス)
- ② 稲垣スーチン 「楽しみながら英語力がつく英語多読入門」講座、大阪府立大学 Library Month October 2017、2017 年 10 月 5 日、(大阪府立大学大学中百舌鳥キャンパス)
- ③ 稲垣俊史 英語多読資料を使った効果的な語学学習とは、プロが教える図書館講習会、2016 年 11 月 25 日、(同志社大学今出川キャンパス)

④ 稲垣俊史 L2 習得と L1 習得の類似点と相違点、ことばの科学会オープンフォーラム 2016 (第 8 回年次大会)、2016 年 10 月 9 日、(関西学院大学梅田キャンパス)

⑤ Inagaki, S., Iori, I., Hasuike, I., Seol, H., & Fukuta, J. The Acquisition of Japanese Grammar by Chinese and Korean Speakers, The Pacific Second Language Research Forum (PacSLRF) September 10, 2016, Chuo University (Japan)

⑥ 稲垣俊史 「どうすればできるようになるか」から考える、『言語の理解と産出チーム』公開研究会、2016 年 3 月 6 日、(中央大学後樂園キャンパス)

⑦ 稲垣俊史 「どうすれば英語ができるようになるか」から考える英語授業、KSU 英語教育研究会・京都産業大学外国語学部英語学科共催平成 27 年度研究大会、2015 年 9 月 27 日、(京都産業大学)

〔図書〕(計 1 件)

① 稲垣スーチン・稲垣俊史 (2017) 『日本の大学英語教育における多読の効果』一粒書房.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

稲垣スーチン (INAGAKI, SHUCHUN)
大阪府立大学・高等教育推進機構・
准教授
研究者番号 : 50405354

(2) 研究分担者

稲垣俊史 (INAGAKI, SHUNJI)
同志社大学・グローバル地域文化学部・
教授
研究者番号 : 00316019